

田村志津枝さん コラム

PICK UP MOVIE

12/16~

『VORTEX ヴォルテックス』

[2021年/フランス/フランス語・イタリア語/148分] G
監督・脚本：ギヤスパール・ノエ
出演：ダリオ・アルジェント、フランソワーズ・ルブラン、アレックス・ルッツ
配給：アンプラグド

© 2021 RECTANGLE PRODUCTIONS – GOODFELLAS – LES CINEMAS DE LA ZONE – KNM – ARTEMIS PRODUCTIONS – SRAB FILMS – LES FILMS VELVET – KALLOUCHE CINEMA

人はどのように 死んでいくのか

パリの、とあるアパートに暮らす老夫婦。住まいには2人の長い歴史が刻まれている。台所や食卓、そして書斎、書棚、机と映し出されるにつれ、ふつつつと笑いが湧きあがる。私の部屋と何とよく似ていることだろう。頭の中の整理に手間取るようになると、それはそのまま書棚や机上にも反映していくらしい。

朝、妻と夫は身じまいをすませてそれぞれの机に向かう。物語の大部分が二分割画面で語られ、別室にいる2人を同時併行で追っていく。見ているうちに、夫婦といえども接点はごく少ないのかも知れないと感じた。妻は机上のちっちゃごちゃの中から何やらメモをして出掛けていく。夫はタイプライターを打ち始める。ふと、夫が手を止める。妻がいない。探さなければ、夫は近所の店をいくつか回り、妻を見つけ出す。心配させないでくれ、と夫は言う。妻はアルツハイマーを発症しているのだ。

妻はかつては精神科医だった。いまでもその片鱗が垣間見える。しかし物事の理解は曖昧で、夫や息子ばかりか自分の家さえ認識できない時がある。妻自身が不安でいっぱいなのだ。一方夫は映画評論家で、いまでも「映画と夢」についての本を執筆中だ。だから、妻の一貫性のない言動に苛立つ。だが実のところ、彼の苛々の原因はほかにあるのだ。

息子は両親に、介護施設への入所を提案する。どちらかが倒れたら自分たちの手には負えない、と。だが父親は家を離れたくない。家には人生のすべてがある。ここを離れて仕事などできない。なぜ死ぬ前に、大切な過去を手放さなくてはならないのか。これは多くの人に共通する思いで、だから話し合いは進まないまま、最期は迫ってくる。

こうした混乱、感情のもつれ、それぞれの内に秘めた秘密、などを表すのにも二分割画面は効果を上げている。同一の場にいる人物の描写でも、視点が微妙に違う二つの画面が並ぶ。するとそこからは、意識や感情のずれ、あるいは人の思わぬ側面が伝わってきて、家族間の感情の複雑さ、人生の摩訶不思議さにまで思いは広がっていく。

ギヤスパール・ノエ監督は、従来は暴力やセックスなどの過激な描写で知られていた。それが本作では老夫婦の日常を描いたことで、注目を浴びている。制作の動機は、自分の母親の認知症と、自らの重病による臨死体験だったという。しかし一見静かな老夫婦の物語をあつかっても、彼の過激な志向は健在だ。人々が目を背けたがるテーマ、老年期と死、アルツハイマーの当事者とその家族を、きれいごとを排して描き切っているからだ。

「人生はすぐに忘れ去られる短い祭りだ」とノエ監督は言う。ならば、老いもまた祭りの一部だと彼は思っているだろうか。

プロフィール

田村志津枝

：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。

